

第11章 祈りについてのパウロ その1⑤



祈りにおける指示

福音が広まるための道筋

すべての人のための祈り



祈りにおける指示

パウロは常々、神学的な主張をなし、また、手紙を受け取る人々のために真理を明確にし、説明し、適用していました。しかし、テサロニケの人々に手紙を書いている時には、アプローチを変えています。教えをリズム良く断片的に語る中で、彼は、すべてのクリスチャンが従うべき命令を簡潔な形で提示しているのです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。……御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません。しかし、すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。……兄弟たち。私たちのためにも祈ってください」(I テサロニケ 5:16-21,25)。これらの切れのいい教えのほとんどは、祈りと関係があります。これは、一世紀のクリスチャンのためであったとともに、二十一世紀のクリスチャンのためのものでもあります。これらの命令を修飾する条件や付随事項は何もありません。患難の中にあろうと大勝利の中にあろうと、これらの命令にはすべて従わなければならないのです。

この箇所の写本としては二つ、注目すべきものがあります。それらでは「いつも喜んでいなさい」に「主にあって」という言葉が付加され、この命令が祈りと関連づけられています(ピリピ 4:4 参照)。真の喜びは、主との生き生きとした関係から溢れてくるのです。私たちをいつも喜べるようにしてくれるのは、私たちの内にある主の喜びです。常に喜ぶための方法は、絶えず祈ることなのです。人はなかなか祈らないものかもしれませんが、祈れば祈るほど喜びは溢れてくるものなのです。「絶えず」というのは、絶えず形式的な祈りを口にするという意味ではありません。これはむしろ、エペソ人への手紙 6 章 18 節の「すべての祈りと願いを用い

て、どんなときにも御霊によって祈りなさい」と共鳴するものです。私たちは祈る時間を計画的に守るべきですが、同時に、必要な時や心が主に向くような機会があれば即座に祈るべきでもあります。パウロは、クリスチャンは祈る以外に何もすべきでないと言っているのではありません。私たちのすることが何一つとして、祈りの態度や精神を妨げるものであってはならないと語っているのです。

それにしても驚かされます。感謝を捧げるとは、祈りとどこまで密接に結びついたものなのでしょう。感謝は、常に祈りに伴うものであるべきであり（ピリピ 4:6）、忠実な祈りの中から育ってくるものです。祈りは神のご臨在へと導き入れてくれるものですが、そこに至って感謝できない人などあるのでしょうか。「どんなときにも」とは、人生のあらゆる領域を網羅するものです。良い時も悪い時も、勝利した時も敗北した時も、喜びも悲しみも、です。省略されるものは何もありません。これは、すべてについて感謝を捧げよという奨励と並ぶものです（エペソ 5:20）。私たちの感謝は、神がすべてにおいて、最終的には私たちの益となるように働いてくださっているということを、信仰によって認識することです。だから、感謝を捧げることは常に、キリスト・イエスにあって、神のみこころなのです（「はじめに」における「感謝」の定義を参照のこと。パウロは、絶えず感謝の態度と表現を保つことは、絶えず祈ることの一つの方法だと提案していたのかもしれない）。

パウロが「御霊を消してはなりません」と語る際には、とりわけ公共の場で現れた言葉の賜物（I コリント 14:39 参照）など、賜物における聖霊の働きに言及しているというのが、共通の理解です。この奨励は、私たちの個人的な祈りの歩みに適用することも適切でしょう。私たちは、神が賜物を与えて導いてくださる、これら異言による私的な祈りの時間を、抑圧してしまわないよう守らなければなりません。また、私たちの関心を様々な課題へと導き、とりなしの祈りをさせてくださる聖霊の優しい促しを、押さえ込んでしまわないようにも、守らなければならないのです。

パウロはまた、祈りを求めています（ローマ 15:30-32 参照）。クリスチャンは、互いの祈りを必要としています（ガラテヤ 6:2 参照）。私たちの祈りにより、神は他の人々の歩みはもちろんのこと、私たちの歩みにも介入してきてくださるのです。クリスチャンが神の働き人のために、祈りとりなすことにより、どれほど多くの悲劇が避けられることでしょうか。どれほど多くの問題が解決され、どれほど多くの説教が豊かな実を結ぶものとなり、御国のためにどれほど多くのことが達成されることでしょうか。



福音が広まるための道筋

福音の成功は、私たちのほとんどが気づいている以上に、クリスチャンの祈りにかかっています。福音が早く、効果的に広まるようとりなすのを怠るということは、かなり広く蔓延している悪です。「だから、収獲の主に、収獲のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい」（マタイ 9:38）。祈りについての、テサロニケの人々に対するパウロの最後の指示も、これを目指すものでした。「私たちのために祈ってください。主のみこと

だが、あなたがたのところと同じように早く広まり、またあがめられますように。また、私たちが、ひねくれた悪人どもの手から救い出されますように。すべての人が信仰を持っているのではないからです」(Ⅱテサロニケ 3:1-2)。

「早く広まり」という表現は、競技場で繰り広げられる競走を念頭に置いたものです。この競走において既に、パウロは主のみことばを思い描き、約束された栄冠が（みことばに）得られるまで、あるいは、（みことばが）「あなたがた[著者注：テサロニケのクリスチャンたち]のところと同じように…あがめられ」るまで、（みことばが）力強く走ることができるようにという願いを抱いています。彼は、祈りとは力を与えてくれる推進力であり、主のみことばをその目指す目標、すなわち新生していない人々の回心へと進めてくれるものであると知っています。祈りが無ければ、この競走は負けなのです。また、この願いの後半部分は前半部分と関連しています。悪しき者たちは、福音の前進を妨げるか、少なくとも妨げようとしします。「ひねくれた」とされている語（ギリシア語：アトポス）は、「場違い」「不正な」「倫理的に悪しき」という意味です。そのような不信仰で邪悪な人々はどこにでもいて、嘲笑や、さもなくば説教者の邪魔をすることで、主のみことばなる方に反対してきます。パウロは、この問題に対する答えは変わらないと認識していました。「神の民の祈りによる解放」しかないと考えていたのです。私たちもそう信じるのが賢明です。



すべての人のための祈り

祈りはあらゆる人のために捧げられるべきです。すべての人のために名前を挙げて祈ることはできませんが、あらゆる集団や階層の人々が含まれるべきです。もちろん、特定の人種であれ、町の依存症患者たち、性的マイノリティーの人々、世俗の当局の人々であれ、それぞれにおいて特に名前を挙げて祈るような対象もあるでしょう。パウロが、私たちの祈りの中で無視すべきではない人々として挙げているのは、特にその最後の部類の人々です。

そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。……ですから、私は願うのです。男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい（Ⅰテモテ 2:1-5,8）。

「願い、祈り、とりなし、感謝」の間に厳密にどのような違いがあるかを見きわめるのは、難しいことです。しかしながら、クリスチャンが神の御座に近づくための方法を示唆しているような区別は存在します。

- 「願い」（ギリシア語：デエーセイス）とは、とりなしの祈りがなされている対象であるその人の歩みにおける不足や必要を、神が補ってくださるような、懇願ないし切なる思いのことです。
- 「祈り」（ギリシア語：プロス्यूハース）とは、霊的なものであると一時的なものであるとを問わず、本質的な必要が満たされるようにという一般的な要求のことです。

- 「とりなし」(ギ:エンテュークセイス)とは、王など目上の者に対する願いを指します。クリスチャンにとってとりなしとは、全能の神が他の人々の必要を満たしてくださるようにと願うことです。「感謝」(ギ:ユーハリスティアス)は、祈りが天に引き上げられていくにつれて、感謝の態度に圧倒されるような様子を示しています。讃美の祈りは常に、主を喜ばせるものなのです。

使徒はおそらくここで、公共の場での礼拝のための指示を与えているのであろう。したがって、この箇所は次のように言い換えることができるだろう。「今、私は勧める。まず、公共の集まりにおいては、悪の諸勢力を拒み、必要とされている良い事柄を切に求め、悪しき人々の回心を求めるようなとりなしをする—そのような祈りが、クリスチャンと同様、ノンクリスチャンのために、友人たちと同様、敵である人々のために、あらゆる人々のために捧げられるように。」

私たちの祈りの本質は二重のものであるべきです。すなわち ①**権威ある地位にある人々のために**、そして ②**平安に満ちた平穏な歩みのために**、という二つです。クリスチャンが祈るべきは、指導者たちが正義と公正をもって統治してくれるようにというだけでなく、○彼らもまた、無分別や邪悪なものの影響から守られるように、○彼らが自らの指導力によって平和をもたらしところとなるように、そして、○彼らもまた救われるようにということなのです(4節)。

さらに、指導者のために祈ることの目指すところは、敬虔さときよさの伴う平和です。クリスチャンは、異教の支配階層と争わなければならないわけではありません。むしろ常に、神に対する信仰と敬虔、従順の内に自らが歩んでいる、社会や政治の状況のために祈るべきです。世俗の指導者のために祈ることは神が喜んでくださることです。なぜなら、救いは、貧しく(社会的に)低い人々と同様、高貴で力のある人々も含め、あらゆる人々のためだからです。

私たちはここで、真の信仰と祈りそのものによって根本的な概念にたどり着きます。すなわち、「**神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです**」(5節)ということです。私たちが祈りの中で近づく神は唯一の神です。他の神はありません。なぜなら、このお方は永遠と無限を満たす方だからです。神は人間のことをとても気にかけてくださっていたがゆえに、ご自身の御子を、私たちとご自分を和解させる**唯一にしてただひとりの仲介者**として与えてくださいました。神はすべての人の救いを願っておられ、自ら無視した、という以外は誰も滅びることがないようにと願っておられます。私たちは救いをいただくために、この唯一にしてただひとりの仲介者、人であるキリスト・イエスを通して、唯一にしてただひとりの神のもとにやってきます。ですから、これは、社会的・政治的な地位にかかわらず、あらゆる人のためでなければならないのです。

パウロは基督教信仰のこの基本的な真理を、どのように適用しているのでしょうか。私たちのふるまいと献身とは、神が与えてくださる救いという永遠の現実と照合するとき、どのようなものであるべきでしょうか。私たちが和解しなければならない唯一の神がおられ、その和解をいただくことができる唯一の仲介者がおられるということから、パウロは語るのです。「**ですから、私は願うのです。男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい**」(8節)。「**同じように**」(9節)とは、「同じ形で」という意味です。したがって、男性と同様、女性もまた、純粋な魂で、きよい、すなわち献身的な、手を捧げなければなりません。ここで「手」という提喻(シネクドキー)が用いられていますが、これは全存

在を代表するものであり、人のまさに生き方を表しています。「きよい手を上げて」という所作は、ユダヤ人と異邦人に共通の慣習でした。祈りの際に手を上げる、あるいは腕を広げるということは、請願や懇願を表します。このようにして、パウロはいかにして聞かれる祈りを捧げるべきかを示しているのです。私たちは、神のもとに赴き、罪のゆえに謙遜な姿勢を取り、神の小羊を自らの犠牲として提示し、神への礼拝と讃美の中できよい歩みを捧げ、そして期待するのです。すなわち、神の臨在に近づくことを楽しむ、そのことを期待するのです。神の義をいただき、そのご臨在に入っていく時に表現される願いには、応答がいただけることでしょう。そして女性たちには、節度と礼節のために、慎みのある服装をすることが、加えて求められています。

祈りが答えられるためには、態度が絶対的に重要です。それゆえ、パウロは「怒ったり言い争ったりする」のを避けるように勧めています。赦すのです。 復讐を思う心を捨てるのです。理屈をこねるのはやめるのです。単純な信仰に敵対する物言いは捨てるのです。できます。可能です。「ですから、私は願うのです」。パウロは言いました。「男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい」。パウロの祈りの特徴は確かにそのようなものでした。私たちの祈りもそのようであるべきです。

学びのための問い

1. 聖霊に目を向け、言葉にならない深いうめきによってとりなしてくださるよう求めるのは大切なことですが、それはどんな環境においてでしょうか。聖霊がそれをなしてくださっているということを、私たちはどうやって知るのでしょうか。
2. 第一コリントⅡ章4 1 6節を、私たちは自分たちの時代にどう適用すべきでしょうか。
3. 異言での祈りが解釈される必要があるのはどんな時でしょうか。
4. 私たちが繰り返し祈ってきた祈りに対し、神の答えが自分の願っていたものではないとき、どうすべきでしょうか。
5. あらゆる機会に聖霊にあって祈ることが大切なのは、どうしてでしょうか。
6. 不安の解消法は何でしょうか。
7. 神の平安の中には何が含まれているでしょうか。
8. 祈りにおいて感謝の占める位置はどんなものでしょうか。また、それはどうしてでしょうか。
9. 初期のクリスチャンは迫害を予期していましたが、パウロはそれでも、平安で安穩な歩みを送れるよう祈りなさいと勧めています。どうしてでしょうか。